

最高に爽やかな一日のはじまりを提供する、Fine Morning Interior。



一日を新鮮な気分で
スタートできる
清潔性

テンポよく
タスクがこなせる
リズム

心地よい
五感への
刺激

視覚的ノイズの少ない爽やかなインテリアを追求。クリーンなインストルメントパネルや水平基調のエアアウトレットなど、デザインと機能を細部まで徹底的に吟味することで、一日を新鮮な気分でスタートできる清潔感をめざしました。

置きたいモノが置きたい場所に置き、望む動作がストレスなくできる室内を追求。上位モデルと同じシフトレバー並列配置のドリンクホルダーをはじめ、見やすさ・使いやすさを徹底追求することで、テンポよくタスクがこなせる機能的室内をめざしました。

運転に不可欠なスイッチ類にも爽快さを求めました。押す、引く、回す、それぞれの操作に最適な形状を吟味したうえで、触感やフィードバック感までを徹底的に磨き上げ、先進の上級家電やICT機器に匹敵する操作感をめざしました。

朝が爽やかなら一日を気持ちよくすごせる、という感覚は多くの人に共通することでしょう。インテリアがめざしたのは、その爽やかさをシビックの室内で提供することでした。そこで、爽やかな朝が何によってもたらされるのか、実際に検証することから開発をスタートしました。検証に選んだ場所は米国カリフォルニア州のサンタモニカ。小振りの一軒家を借りて滞在すると、まず、リビングに差し込む朝の光の美しさに驚かされます。通勤途中のカフェで振る舞われた炭酸水に心地よい刺激を感じる一方、車内のちょっとした分割線や面の折れが気になるなど、早朝は人間の感覚が敏感であることに気づかされました。こうした体験から、爽やかな朝に欠かせない要素として、「清潔性」、「リズム」、「刺激」を抽出。最高に爽やかな一日のはじまりを提供する、Fine Morning Interiorをコンセプトに、その実現をめざしました。



インテリアデザイン担当
小川 泰範 おがわ やすのり

インテリアは人とクルマを結ぶインターフェイスそのものだと思います。であるなら、運転に不要なカットラインや面の折れを徹底的に排除し、シンプルでクリーンな室内をめざしたいと考えました。しかし、シンプルであることがゴールではありません。運転して感じる爽快な視界、動作を妨げないレイアウト、スイッチ類の小気味よい操作感、それらすべてを融合させて、Fine Morning Interiorを完成させました。



CMF (Color Material Finishing) 担当
渋谷 恭子 しぶや きょうこ

感覚的な言い方ですが「爽やかな朝の空気感」を創り出すことが目標でした。華美に飾り立てるのではなく、シンプルでありながら質が高く親しみやすい、たとえば軽快なスピーカーから感じられる爽快感です。そのうえで、朝の心地よい刺激となるアクセントとして、シート表皮や加飾パネルをデザインしました。新型シビックの室内で、ぜひ、確かめていただきたいです。